

Inclusive education

学校教育部長

太田 洋子

兵庫県生まれ。伊丹市立中学校数学科教諭、平成13年4月から伊丹市教育委員会指導主事、教育施策企画担当主幹、学校教育室長を経て平成21年4月から伊丹市立東中学校で校長として4年間勤務。平成25年4月伊丹市教育委員会事務局学校教育部長。

対 談

教育ジャーナリスト

品川 裕香

兵庫県生まれ。教育・社会問題等を予防的観点から取材執筆。著書に「若い人に贈る読書のすすめ2014」(読書推進運動協議会)に選定された「働く」ために必要なこと」他多数。第一次安倍内閣教育再生会議委員。前文科省中央教育審議会専門委員。

伊丹市は個々の子どもの教育的ニーズを踏まえ、
どの子も伸びる教育の実現を目指します

教育が変われば子どもが変わり、
子どもが変われば大人が変わり、社会が変わります

伊丹市が取り組むインクルーシブな教育システムについて、学校教育
部長 太田洋子さんと教育ジャーナリストの品川裕香さんが語ります。

品川 伊丹市では藤原保幸市長が日頃から「まちづくりは人づくりから」とおっしゃっておられ、「人づくり」を施策の柱の一つと位置付けていると伺いました。

太田 ええ。私どもでは「人づくり」とは、伊丹市にいるすべての子が伸びる教育を実現することであり、インクルーシブな教育システムを構築することだと考えます。ポイントは①個々の子どもの教育的ニーズに気付く、②その個々の教育的ニーズを踏まえてどの子もわかる指導を行い、必要な子どもには支援をしていく、③①②と同時に、規律とルールを明確にした学級づくりを行う、の3つです。

さらに、管理職は、先生方がこれらを具体的に実践していけるように仕組みづくりをしていかなければなりません。

品川 具体的には、どういうことでしょうか。

太田 まず一つめの「個々の子どもの教育的ニーズに気付く」という点ですが、私が管理職を務めた中学校に、どうやっても数学がわからないという生徒たちがいました。繰り返し、丁寧に教えることはやっていましたが、それだけでは不十分で……。そこで専門家の指導を受けながら、教師が一丸となって子どもの特性を、行動面などを観察するなど発達的な視点から分析するようにしました。

品川 すると、数学がわからないのは、小学校からの積み残しなのか、生まれつき空間を捉える力が苦手なのか、記憶するのが苦手なのか、環境要因的なものから来ているのか等々が見えてきたんですね。大まかにでも捉えられれば指導のターゲットが変わってきます。

太田 教育的ニーズを発達的な視点から見ると、教師の気づきも向上しました。

品川 気づきが向上し、発達的な視点で子どもを捉えられるようになれば、指導方法も変わってくるはずですよ。

太田 ええ。すると今度は、どう指導をしたら効果が上がるか、またしても教師たちが研究しはじめました。1人の先生が気づいたことを、複数の教師の目で今一度分析し、ニーズと指導方法を検討するようになったんです。

品川 学び方が異なる、学習そのものが足りない、学ぶのに時間がかかるなどいろいろな子がいるはずですが、そこはいかがですか。

太田 授業のユニバーサルデザイン化を進め、ほかに学校・家庭・地域の三者が連携し役割分担しながら子どもたちを指導する土曜学習会も開きました。学校を開くことはすべての子どもたちの教育権を保障していくうえでとても大事だと考えました。

品川 これまで取材してきた学校でも、指導効果を

上げているところはみな土曜学習会、放課後学習会等多様な学びの場を設け、かつ地域の方々も積極的に関わっておられます。ゆっくり学ぶ子、学びが足りない子にはこういう方法は効果的です。ただ、モノの見方や学びの多様性などを踏まえると、一斉授業だけで全ての

の子が分かるようになるわけではない点は注意しなければなりません。

太田 もちろんです。それに、個々の教育的ニーズをどれだけ分析し、どれだけ授業を改善しても、学級づくりがうまくいかなければいじめも起こりますし不登校にも繋がります。だからこそ、学級づくりが大事になります。

品川 同感です。その点はどうされましたか。

太田 伊丹市にはクラス全員が参加して、クラス対抗、勝ったら今度は学校対抗の「ムカデ競争」や合唱コンクールがあります。こういった、クラス全員が参加する行事を通して、子どもたちの絆を構築するよう指導しました。ムカデ競争がうまくできないなら、なぜできないのか、どうしたらできるようになるのか。学級をしっかり作れば、子どもたちの人間関係が構築され、子ども同士で話し合ったり問題を解決していったりする力も育ちます。

品川 クラスの組織目標にムカデ競争や合唱コンクールでの優勝を

設定する。クラスの一員は、その組織目標達成のために努力していく、と。組織を作る上での原理原則です。

太田 現場の先生方が少しでも取り組みやすいような仕組みをどう作るかは、管理職の仕事になります。例えば、担任を交換する「担任シャッフル」、若手教員とベテラン教員がチームになって道徳の授業を行う「ローテーション授業」、公開授業を全教員が行う、クラスのルールと規律を守るためのチェックシステム、若手教員の研修会を多数開くなどの仕掛けが先生方のアイデアで次々と実現していきました。

品川 そういう仕組みが先生方の意識改革や資質向上に直結していったのですね。いい仕組みは必ず残り、他の学校にも伝搬し、地域全体が向上して共生社会ができあがっていくきっかけになります。

太田 実際、これらの仕組みは市内の他の小中学校に広がり始めています。こういったアプローチはすべての子どもに効果がありますが、そのためには、保護者や地域の方々に正しい情報を発信していくことも求められます。

品川 教育が変われば子どもが変わり、子どもが変われば大人が変わり、大人が変われば社会が変わります。今後、伊丹市が構築するインクルーシブな教育システムが楽しみです。今日はありがとうございました。

